

『豊里大橋』は昔、 "平太の渡し"と"今市の渡し"

やった!

大阪は、淀川を中心とした多くの河川と堀川により水都として成長し、「浪華の八百八橋」といわれたとおり、橋梁技術の変遷とともに多くの橋が架けられ、大きく発達した。古墳時代の河内地方は、淀川や大和川の度重なる氾濫により河内湖となり、大和王朝初期は、派生する河川の治水や改修と、農耕地の開拓により強大化したと考えられている(『日本書紀』)。飛鳥・奈良・平安時代には、僧侶や渡来系豪族も土木事業をしている(『日本後紀』)。中世の橋は地方の有力武士団が橋梁建設に加わり、戦国時代を経て織田信長の実学に触れた豊臣秀吉により近世大阪の町づくりが始まり、江戸期徳川幕府は町人の助力を得て河川改修、堀川の開削、市街地の拡張、京街道の整備の木造架橋など多くの建設事業を行った。



■ 豊里大橋

鉄橋架設～新技術の開発

近世明治の文明開化により木造石造に代わる鉄橋架設が始まり、鉄道とともに陸上交通の要である橋には、大正期コンクリート橋が出現する。昭和初期には意匠デザインの優れた多くの架橋がなされた。第二次大戦後の復興期、大阪の橋は補修・復旧と高潮対策に力を注がれた。昭和30～40年代の自動車社会に対応するため、また大阪万国博覧会開催に向けての都市計画により堀川は埋められ、道路建設が進み、橋の長大化が必要となった。新技術の高張力鋼が開発され大阪初の斜張橋は、豊里大橋であり、淀川に新たな、今も美しい景観をもたらし、市内の長大橋建設の始まりとなった。橋梁技術者の夢を可能にし、50年代以降、設計施工技術と景観面からもわが国の橋梁技術向上に大きく貢献した。そして旭区と東淀川区を300年間、結び活躍していた「渡し」は役目を終えた!

南大道村の土豪、沢田佐平太

「平太(田)の渡し」は、江戸期延宝4年(1676)頃にかかれた。大坂町奉行から認可を受けて、手広く渡船業をしていた南大道村の土豪、沢田佐平太(収益を農民たちの年貢として納めていた。出身は奥州東北の武士で、沢田家文治年間1185~1190にこの地に移り、慶長年間の大坂の役で家康に味方した功績に対する恩賞として渡船16カ所の特権を得た内の一つである。堂島川、木津川等の渡船権利も得、中島一帯を開墾し、菩提寺大沢寺も建立した)の名からとも。

また、当時の渡しは西成郡豊里村大字天王寺荘字平田と東生(ひがしなり)郡古市村大字今市を結んでいたため、この地名からとも考えられてもいる。

ちなみに、27代安閑(あんかん531~535年)天皇の頃、この辺りは放牧の適地として牛が飼われていて(乳牛牧跡-ちちうしのまきあと)、聖徳太子も度々訪れ、この地を四天王寺建立の候補地と考えられたが洪水が多いため、現在地に建てられた故事があり、大正14年(1925)大阪市に編入されるまで西成郡天王寺庄とされたのは、この説からともいわれている。



■豊里大橋と平太の渡し(写真:(財)大阪市都市工学情報センター)

豊里の名も聖徳太子の別称豊聡耳皇子(とよさとのみこ)から名づけられたとの説もある。この地は丹波地方や大和地方への交通の要地で、淀川上下の川船改めの「平田番所の渡し」(江戸期元禄14年(1701)発行『撰陽群談』に記述)とも呼ばれ、淀川兩岸は渡船で結ばれていた。江戸期文久元年(1861)に発行された『淀川兩岸一覽』(松川半山画、暁晴翁著)△上り船之部上巻によると **“今市渡口”** (いまいちのわたし) 森小路村の上にある。東生郡今市村より、西成郡平田村への舟わたし也。 **今市** 渡場の一村なり。毛馬より此処まで、水上凡(およそ)十一丁半余。 **撰河之國境** **今市村**、土居村の間にあり。△下り船之部下巻によると **“平太渡口”** (へいだのわたし) 撰州西成郡平太村より、同東生(ひがしなり)郡今市村へ淀川をわたす舟渡しなり。 **今市のわたし**とも云う。平太より大坂へ、行程凡二里。・・・の記述がある。

明治30年から淀川大改修工事により流れが変わったが、その以前は旧市電の走っていた国道付近を川幅も今の四分の一ほどで流れていた。しかし、新淀川の開削工事により豊里村が分断され、古市村が陸地へ押し上げられたため、明治37年以降は豊里村内の飛び地を結ぶ村営渡船場(請負制)として存続し、明治40年から府営となる。渡船代金は大人2銭(現代換算で100円かど)、子ども1銭、牛馬4銭で1日の利用客は100人程という記録がある。〈参考:当時アンパン2銭、市電1区4銭〉